俳諧一葉集

後編

一

へ 5
4393
6

芭蕉翁嘗曰附合文章茶話俳諧遺法消息也一代之風藻雖不可考干茲所謂親親於古書收藏於他庫也悉以寄焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北槙里
一具庵藏梓

序

俳諧者能常道而中格妙門也世人妄謂一時戲言綺語也豈支然耶蓋能致知而達理之常變氣之順逆固守自得遊心於太虛則語默作止無有不善故

へ 5
4393
6

棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身備家整學不外乎
此矣昔從芭蕉啟西風雲從風
靡今雖其流閒有淆者泝源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可
謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序

文政十癸歲回月

仙波僧正書于蒼蔔
林中之谷神齋

昭和九年十月十日購求

俳諧一葉集紀行之部

古学庵 佛子 編
幻窓 湖中
坎窩 久藏 校

甲子紀行 又称野曝紀行

本国を発して故郷を見捨て三更月二千日入といひけん
むかしの人の杖とすがるまで真享甲子秋八月江上の破屋を
蜘の網とはらふけふ
秋十とせ却て江戸をさすや 古巣
雁がねもつらつらと雨後の山かな

旁時白不二をとゝめぬなてはきしるき
何うしの里と云ける八はらひそのはなとあるて業のさと
なをつくし侍る学と英逆のおもしろく湖友子侍る外
此人

源川や芝屋をとゝ不二子はのけゆく　子里
不苗川のふとくをゆくを三はうあるのはるれけり
浪あり此川のふ潮よかけて浮寄の波をきのくにかゝる家
をうつはなまり写と拾遺けん小萩うをの秋のはるをひ
やちるふんはのよやきををんと被よるをひ拾ふけて通るる
猪をの人拾るを人　秋の風ゆるる
いのをやの海父を悟れるを母をるをれるる父八海を悟
もをはのし無海をうをもをるあしはられをしてをの性此

はをるをやををなけ
大井川ををるをれ神を白をるけをハ
秋のはれ白はをゆひれん大井川　子里
玉上の吟
花の色は本稲ハ玉をるを　咲をれるる
世をはをを月の月かををの尺をを山の和除いをををはを玉上を
敷ををれを数里はを心敷はをを杜牧の早行の詩を小萩の
中山を玉て忘をを
玉をを　あるて詩を身をを一菓の松
松紫屋風漏の伊勢をはをるを家のおをををを十をはの
月見ををを玉海月を寸後を帯に撫を一囊をををけて
をを十八の詩をををはをを侍を似て蕎麦を侍を似て牧ふし

我僧にあらすといへとも浮屠の属にたくへて
神前に入事をゆるさす暮て外宮に詣侍りけるに一の
華表の陰ほのくらく御燈処々に見えて又上もなき
峰の松風身にしむ斗ふかき心を起して
三十日月なし千とせの杉を抱嵐
西行谷の麓に流あり女とものいもを洗ふを見るに
芋洗ふ女西行ならは哥よまむ
其日のかへさある茶店に立寄けるにてふといひける女あか名
に発句せよといひて白き絹出しけるに書付侍る
蘭の香やてふの翅に焼物す
閑人の茅舎をとひて
蔦植て竹四五本のあらし哉

長月の初古郷に帰りて北堂の萱草も霜枯果て今は跡たに
なし何事も昔に替りてはらからの鬢白く眉皺寄
て只命有てとのみ云て言葉はなきにこのかみの守袋をほと
きて母の白髪おかめよ浦島の子か玉手箱汝か眉もやゝ
老たりとしはらく泣て
手にとらは消んなみたそあつき秋の霜
大和の国に行脚して葛下の郡竹の内と云所は彼ちりか
旧里なれは日ころとゝまりて足を休む
わた弓や琵琶になくさむ竹のおく
二上山当麻寺に詣て庭上の松を見るに凡千とせも
経たるならむ大いさ牛をかくすともいふへけんかれ非情といへ
とも仏縁にひかれて斧斤の罪をまぬかれたるそ幸にして

たふとし
僧朝顔いく死かへる法の松
ひとり芳野のおくにたどりけるにまことに山深く白雲
峯に重り烟雨谷を埋て山賤の家處々にちいさく西
に木を伐音東にひゞき院々の鐘の聲は心の底にこたふ
昔より此山に入て世を忘れたる人の多くは詩にのがれ
哥にかくるいでや唐土の廬山といはんも又むべならずや
ある坊に一夜をかりて
砧打て我にきかせよや坊が妻
西上人の草の庵の跡は奥の院より右の方二丁ばかりわけ
入ほど柴人のかよふ道のみわづかに有てさかしき谷を隔
たるいとたふとしかのとくとくの清水は昔にかはらずと見えて
今もとくとくと雫落ける
露とくとく試に浮世すゝがばや
もし是扶桑に伯夷あらば必口をすゝがん若是許由に
告ば耳を洗ん山を登り坂を下るに秋の日既斜になれば
名ある處々見残して先後醍醐帝の御陵を拝む
御廟年経て忍は何をしのぶ草
大和より山城を經て近江路に入て美濃に至る今須山中を過て
いにしへ常盤の塚有伊勢の守武が云ける義朝殿に
似たる秋風とはいづれの處か似たりけん我も又
義朝の心に似たり秋の風
不破
秋風や藪も畠も不破の関

大頃子海うつ枝八木因う家をしうもうむさし殿をもう
対殿をふしをやう思ひて旅をけれハ
ひときの如旅初のそらよの秋のとれ
素名市富ちうし
牡丹まうよ初のうきよ
芍の枕う富俳をまさ初のうき中演の文出て
ゆけ海のやきう奥白おうの一寸
熟因う俳い社阪大う彼れ鶯俳八うゆれて芍もうう
かくうの一う跳を張さ小社の俳をまうこ居をとう
てう俳と芍のう蕉きのふ四のうう生まうう芍のしう
めし度うとも心歩うう
きのふさく枕て餅うふやううれ

名護屋子入芍の海と俳うう
牡白本うふし氏多八市重俳う外
芍枕犬をきうう芍うよれ蕉
市人よこの笠 芍の笠
旅人を尺る
ううとさくふうむう笠の河うう
海をうう海うううううさく
海芍う野の市うのう白し
うう芍雑をとおかうう枝を拾て旅お物をのうに手け
芍けれハ
手ううれ笠きし芍雑をうう芍のう

[illegible]

二月[illegible]

水[illegible]の[illegible]の[illegible]と

[illegible]三井秋[illegible]

梅林

[illegible]

櫨の木の花[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]の[illegible]

大[illegible]

山[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

吟行

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ひ来りけれハ

いさともに穂麦くらハん　草枕

此僧予に告て云円覚寺の大顛和尚ことし睦月のはしめ遷化し給ふよしまことや夢の心地せらるゝに先道より其角か許へ申つかはしける

梅恋て　卯の花拝む　なみたかな

贈杜国

白けしに羽もく蝶の　かたミかな

二たひ桐葉子かもとに有て今や東に下らんとするに

牡丹蘂深くわけ出る蜂の名残哉

甲斐の山中に立よりて

ゆく駒の麦になくさむやとりかな

卯月の末庵に帰りて旅の労をはらすほとに

夏衣いまた虱をとりつくさす

藤島紀行

海の奥宮浜の浦の海人をゆかさ

松うけや月をまつ三日敷中納言

とうけん粧束のもうしあつかりきに式秋かしきの山の

月をんと思ひきとゆう侍人やう法寺の士ひとり一人ハ

ふくやの信とハかりすのてくかの雲を給

うけ出山ゆう像を廚るゆう先入こうしてうを恵

教秋引ふくく門の羅もきいつものかくはあつちて

智御てむぬをひくくハ侍まあらし侍まはふに乱

はをうをかくふのちまぶまるまくく門より

舟をのうをけ地とをもあるあるれハをとのらい

羽經のちうをはあをんとあらをゆく甲斐ふよう

成人のえををくるひの木をしけくれる笠をかのしいくき

ををひくやをくとを里ををされハかをうゆ原をひろお

野ゆう崇同の一を里をとを和同をくをを尺をくを祖法

山むうをうをくを二峰を引ををひをかの高ちを改制のををひゆを

ゆ一ハ高山の一陽をう

やををりををまけむくをけのつくを

と後一ハ手門人尾をやを白ゆうまくを山ハ手武をゆと

はをはくくを速をすを人のををあをを仏をうを方をを

ハをををうをを白なくハををををををををを山のをを

をうをを崇を孫を沈をををををを岩仲を長概を

ゆ入く杉の作をを杉ををを沈みくをひきちのく

史郎乗かるを長古みくれゆひを小男麻の作ををひを

ふいとあはれなり野の駒所えがほにむれありく又あはれなり
日既に暮かゝるに利根川のほとりふさといふ所に
つく此川にて鮭のあじろといふものをたくみて武江の
市にひさぐもの有よひのほど其漁家に入てやすらふ
よるのやどなまぐさし月くまなくはれけるまゝに夜舟
さしくだして鹿島に至る昼より雨しきりに降て月見る
べくもあらず麓に根本寺のさきの和尚今は世をのがれて
此所におはしけるといふを聞て尋入てふしぬすこぶる
人をして深省を発せしむと吟じけむしばらく清浄の
心をうるに似たり暁の空いさゝかはれけるを和尚起し
驚し侍れば人々起出ぬ月の光雨の音只あはれなる
けしきのみむねにみちていふべきことの葉もなし

月見に来るかひなきこそほいなきわざなれかの何が
し女すら郭公の歌えよまでかへりわづらひしも我ためには
よき荷担の人ならんかし

をりをりにかはらぬ空の月かげも
ちゞのながめは雲のまにまに　和尚

月はやし梢は雨を持ながら　桃青

寺に寝てまことがほなる月見哉　同

雨に寝て竹起かへる月見哉　曾良

月さびし堂の軒端の雨しづく　宗波

神前

此松の実ばえせし代や神の秋　桃青

ぬくとくや石のおやしの昔の家　宗波
綜おりやかしこまりおくあの家　胃良

田家

かりうけし田面の鶴や里の秋　桃青
稲田うるおす水やとくれん里は有　宗波
鶴のこやや稲すりうけくあるとうら　桃青
芋の葉や有やの里は焼そばけ

野

ものこやや一花すりけ萩こぼと　胃良
ものの秋ものこりいのく咲るこのまま
萩ふやや一枝ハやとを山の　桃青
昭後自準之為

湖をよこぎる手有外友　松江
秋をうめるくわのさし　桃青
月入くと沙のくらの舟よこて　胃良

貞享丁卯仲秋末五日

卯辰紀行　又稱芳野紀行

百敢九穀の中に物ゆかしく思ひ分て風雅の道に心を
寄せ、ものゝ興を深くもとめやすらんとしいとわびしかれ粧
ひを飾りて久しく絶て生涯すくなくて老みて
俗を放擲きんとて我ひとり舟にすんで人をかろんずるを
かろき見非拘中を作るあるこゝろ為あのふるさとに
為をもとめて我わびしくもこれ為すさびに成さるべく
思ふ事を思ふさまさん事を思へども是つゝ為ふ事を除き
事能無意にして共に一節に法れうの面白のおもむきを
家族の迷惑にかゝる事なかれ利休の茶における
千典太をするもの八一寸ばかりの道化をもて

を深くを友とす尺に花をゆふ心をとゝめ所一思ひ出あるは夫秋の
哀をもとめて道化をうひ道化をうへれく
秋の月の初雪をもとめるもけしきあハれ楽のり方を心
ゆくし心花をゆふ心をとゝめ所一思ひ出あるは夫秋の
哀をもとめて道化をうひ道化をうへれく

松人

とゝの居ようくれん初しくれ
山茶花の住居方郎とゝ為しうしてゝ
筆道をんとゝもあ式紙を付て女角亭おゆゝ
みて秋ゝ秋ゝ所をこゝんん松の情と
時の八雲法ようにし所ゝを付ゝるゝとゝふ初けの付あ

としころ旧友親疎門人等或ハ詩歌文章をもて訪ひ或ハ
草鞋の料を包て志を見すかの三月の糧を集るに
力を入す紙衣綿子なといふもの帽子したうつやうの物
心々に送りつとひて霜雪の寒苦をいとふに心なし
或ハ小舟をうかへ別墅にまうけし草庵に酒肴携来て
行衛を祝し名残を惜なとするこそゆへある人の
首途するにも似たりといと物めかしく覚えられけれ
抑道の日記といふものハ紀氏長明阿仏の尼の文をふる
ひ情を尽してより余ハ皆俤似かよひて其糟粕を改
る事あたはすまして浅智短才の筆に及へくも
あらす其日ハ雨降昼より晴てそこに松有かしこに
何と云川流れたりなといふ事たれたれもいふへく覚侍れとも

黄奇蘇新のたくひにあらすハ云事なかれされとも其所々
の風景心に残り山館野亭のくるしき愁も且ハ咄の種と
なり風雲の便りとも思ひなして忘れぬ所々跡や
先やと書集侍るそ猶酔ル者の猛語にひとしくいねる
人の譫言するたくひに見なして人又亡聴せよ

鳴海にとまりて

星崎のやみを見よとや啼千鳥　はせを

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて都も遠くなる
みかたはるけき海を中にへたてゝと詠し給ひけるを
自らかゝせ給ひて給りけるよしをかたるに

京まてハまた半空や雪の雲

三河の国保美といふ所に杜国か忍ひて有けるを訪

んと先越人に消息して鳴海より跡ざまに二十五里尋
かへりて其夜吉田に泊る

寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき

あまつ縄手田の中に細道ありて海より吹上る風いと寒
き所なり

冬の日や馬上に氷る影法師

保美村より伊良古崎へ一里計も有べし三河の国の地
つゞきにて伊勢とは海へだてたる所なれども
いかなる故にか万葉集には伊勢の名所の内に撰入られたり
此洲崎にて碁石を拾ふ世にいらご白といふとかや骨山と云は
鷹を打処なり南の海のはてにて鷹のはじめて渡る
所といへりいらご鷹など歌にもよめりけりと思へば

猶あはれなる折ふし

鷹ひとつ見付てうれしいらご崎

熱田御修覆

磨なほす鏡も清し雪の花

蓬左の人々にむかひとられてしばらく休息する程

箱根こす人も有らし今朝の雪

有人の会

ためつけて雪見にまかる紙衣哉

いざ行む雪見にころぶ所まで

ある人興行

香を探る梅に蔵見る軒端哉

此間美濃大垣岐阜のすきものとぶらひ来りて歌仙あるは一折

なと謬して広小路ある名護屋をむさし旧里に入るとき

旅ねして見しや浮世の煤はらひ

桑名よりくはで来ぬれはと云日永の里より馬かりて杖つき坂のほる程に荷鞍うちかへりて馬より落ぬ

かちならは杖つき坂を落馬哉

と物うさのあまり云出侍れ共終に季の詞入らす

古さとや臍の緒に泣としのくれ

宵の年空の名残をしまんと酒飲夜ふかして元日寐わすれたれは

二日にもぬかりはせしな花の春

初春

春たちてまた九日の野山かな

枯芝やゝ陽炎の一二寸

伊賀の国阿波の庄といふ所に俊乗上人の旧跡有護峰山新大仏寺とかや云名はかりは千歳の形見となりて伽藍は破れて礎を残し坊舎は絶て田畑と名のかはり丈六の尊像は苔のみとりに埋れて御くしのみ現前とをかまれさせ給ふに上人の御影は今た全くおはしまし侍るそ其代の名残うたかふ所なく泪こほるゝはかり也石の蓮台獅子の座なとは蓬葎の上に堆く双林の枯たる跡もまのあたりにこそ覚えられけれ

丈六に陽炎高し石の上

故主蝉吟公の庭にて

さまさまの事おもひ出す桜かな

伊勢山田

伊勢木の花とはしらでうゑしかど
稚子はまさきにぞ見ぬ

菩提山

吐山は岩さ出よ地元ちり
就尚舎

物のふるまいとふ蔭のそとの
調代民新事事舎

梅の木や鉢やとく木や梅花
子尾舎

芋植さ門さ家みわのくこの角
祈願のうちる梅一本植ることとやと祈

同所にて家伝れハ兵伝とる所梅つゝ梅一本ありて
子良の家のくゝ乃こ一ま伝ることかと伝ふ

おまらいるまよ一まよのうめの木
祈願や祈願ひとうけの恵保像

やまひまさ伝とそとうふ之の花の香と色
ひく枝形と朱さ芽種の木やはひこんとまるかの
ゆゝ古吟こと芽ゝ冨ゝ人の伝おうこもものひ伝と
旅行のゆくれをよ見且ハこうふ方向ゆと先をとまとに
ゆくくらゝきこのさんハ無伝いそや門出のたくふ
れとをんと笠の内ゝ蔭ちち
乾坤舎住田行二人

よし野にて桜見せうぞ檜木笠

よし野にて我も見せうぞ檜木笠　万菊丸

旅の具おほきハ道さはりなりと物みな払ひすてたれとも夜の料にと紙衣ひとつ合羽やうの物硯筆紙薬等昼笥なと物に包て後に背負たれハいとゝ臑よはく力なき身の後さまにひかふるやうにて道猶すゝますたゝ物うき事のみ多し

草臥て宿かる比や藤の花

初瀬

春の夜や籠人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶見たし花に明行神の顔

三輪　多武峰　臍峠　多武峰より龍門へ越る道也

雲雀より空にやすらふ峠かな

龍門

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみに語らんかゝる滝の花

西河

ほろほろと山吹ちるか滝の音

蜻螟か滝　布留の滝ハ布留の宮より二十五丁山の奥也

布引の滝　津の国幾田の川上にあり　大和箕面滝　勝尾寺へ越る道にあり

桜

桜かりきとくや日々に五里六里

はれ花に笑てさひしや伊勢ならし
扇にも風のむらけや夜仕くら
昔清水
春雨の木ゝに流るゝ音をさらけこゝろまゝ
よし野の花に三たひまで物の名の外の氷のけしきまなひ
更科の月の清きれならさりぬを心やすく猶あこかれ成ハ
松嶋の緑をうちて色けの枝ありなからひかの貞室かされ
られハ只村の宝にまた香はせんと紫まかせて行くに
以と芽もいらねは深し思ひ見する風流のあしく伏なれ
こゝに至て此無のまゝあり
言脚
父母のきまりに違しましの郁

夜寒にかゝさそつゝのし身の程　万象
和哥
いまに和哥の浦さし追舟
紀三井寺
跪ハやまれて飛はねてひとしく天龍のこゝろしを思ひてるは
かゝ麻を生きよれし野のことの心にうつらふ山野海浜の美景を
造化のたくみを見はらせ世俗の無常の恨をたつて風情の
人の心をとらふ物栖を捨て寂しみの神の相ひ身をされ
八道中のしるひとよし寛安楽ありうる飲食肉ようてはなし
酒るくきゝにかまうれくるへる静か野にありし只一夜の宿にこの
こゝまひよるに宿かりん学雑の糸見けよれとしきとすともへて
さかりくの花の色しみとしき香を特しをしに精をとゝのしもむすめ

に風雅ある人に出あひたるよろこびかぎりなし日比ハ
古めかしくかたくなゝりとにくみ捨たる程の人も辺土の道
づれにかたりあひはにふむぐらのうちにて見出したるなど瓦石の
中に玉を拾ひ泥中にこがねをえたる心地して物にも書付
人にもかたらんとおもふぞ又是旅のひとつなりかし

更衣

ひとつ脱てうしろにおひぬころもかへ

よし野出て布子売たしころもかへ　万菊

灌仏の日ハ奈良にてこゝかしこ詣侍るに鹿の子をうむを見て
此日におひておかしけれハ

灌仏の日に生れあふ鹿の子かな

招提寺鑑真和尚来朝の時船中七十余度の難をしのぎたまひ
御目のうち塩風吹入て終に御眼盲させ給ふ尊像を拝して

若葉して御目の雫ぬぐはゞや

旧友に奈良にてわかる

鹿の角先一ふしのわかれかな

大坂にてある人のもとにて

杜若語るも旅のひとつかな

須磨

月はあれど留守のやう也須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

卯月中比の空も朧に残りてはかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに
山はわか葉に黒みかゝりてほとゝぎす鳴出づべきしのゝめも
海の方よりしらみそめたるに上野とおぼしき所は

春の海をしのぐみあひて漁人の網ちるまでけしの花のた
えしこそたゝさまる

海辺のうたまつりくらやけしの花

東海道西海道の海辺をたゞ三里ばかりうんこうふうちく伯耆
すると尺しのりかわつかれ伯耆も今ハ
かつうさすれとも尺にけきまことに奥をはなれて嘉
村上を手ちらしうをもて島の飛来りてけうみをうこれを
みくうをもてはやすて海辺のうをもて尺にけ
古戦場の海辺をとゝめてうるをかなるひといく家
源くを戦皆れ之しきやに孫義を嘆つのわんをする
ひきするれくうしてくひまきくうをまんし
うすうしう梵の義后うし物をうをくおれいひをう

ふ伯耆尺しうかれハ十さとけん里の童ようハ四つ
をうも朱ふくをもを数百文の先生をしく年筋嘆頃の
岩根をくひのれハ十人歳めくおをはうをひしうを
伯耆しに根無をとうつきをきしけをひをしを潮や
門を入うを心詩ふを等ひぬかうをし

伯耆の海辺の夜を夕暮やけきを
月うきをを伯耆寺や高山
伯耆をもやうをぬ箱きく本石寄

四月秋伯
増蕉やはのれを寄ををの月
かうををを秋をうをやは海の夜ハ社を寄をする
なをくしをきは秋をうをハいをの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

更科紀行

[illegible]の里姨捨山の月見んと志ざすこころ[illegible]
[illegible]
[illegible]

月をうち眺めてうめきかの君の行方情の心
うくさぶらひけるやと推量し秀句唐人ようよりの
あるめうらうぢのうちの数を寄せ物のうちのやうと
思ひ寄るも物ばくるうて風情めさけうと出さ物を
立ちもとまれとてくやきれさる月影の隠れより
本宮かくれてきし入さくり板のうちあれ寄しつゆし
けるやうに少しき秋のうちうらいてれ月の
ゆうしと酒うまんとせ八重物むらうのつれと一めうの
大きううしさあつうかる前陰をしうち板の人八物うるの八
風情外しうまるとうのうちうしやひうけめ無さへ今
清徳公屋のへやきうしもうのうし

ゆけ中と前陰ちうし　宗祇　月

うけうしやいのちうしうむ苦ようつ
かけけしやいりかもいむ物むうい
空かうれう桜八月ふうふうけ　越人
姉行山八情ようう里ようう一里ようう南ようう横ようれう
すうさうしううううゆうかうしうしき完れうしうしに
只ゆううん海ふ山のすううかうなくうう人よういうきんう
てううきうれうてうう子如きうう白かううの赤ようる人うう
行うんうう思ふうう海ようう春ううひうれ八
伴や姉　ひうう伝　月ようう友
ひううひうやうう文　科の形うう年
更科やこううの月　月ようう月ようれ　越人
ひううしうう行　雪けしやうう人

あすもみて大根かるし秋の風
木曽の稼うき世の人はちえうす
ふるさとのおろかなりけるは木曽の秋

養光寺

月影や四門四宗も見しらず
吹風まうるる法の百は聖かな

おくのほそ道

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人なり舟の上に
生涯をうかべ馬の口とらえて老を迎ふるものは日々旅にして
旅を住とすむかし人も多く旅に死せるあり予もいつれの
年よりか片雲の風に誘はれて漂白の思ひやみがたく海浜に
さすらへ去る年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひてやや
年も暮れ春たつる霞の空に白川の関こえんと心そゝるる神に
物つきて心をくるはせ道祖神のまねきにあひて取もの
手につかず股引の破れを繕ひ笠の緒付かへさせ三里に灸
すゑるより松島の月まつ頃やいかに千載の一片
風雅の思ひ胸にうかみて海道の空も春霞たなびく
関の戸を越ゆる代りの歌

四八月を花の枝ゝ[illegible]
とゝさ月八ゝかゝ[illegible]
うゝ尺ゝ上野信中の[illegible]
まゝきかゝ八青ゝ[illegible]
ゝきゝ毎ゝ[illegible]
ゝに[illegible]

ゆくまゝ[illegible]

ゝれゝ矢立ゝ[illegible]
中ゝ[illegible]
ゝ[illegible]
ゝ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

那須の三郎宗重、名を惜しむあまりに、
すでに情しらぬまでなりぬれば、
樵夫とおぼしき旅人のそばを通りかゝり、
彼れ八氏なるべき者、
ちひさきものゝふなるべし、
名をかくしてと云ふ事なれば、
このさわぎ八八幡ふさしこの名ふるくし　曽我
やうて人里まぢかれば、
思ひの餘代浄坊寺にしの方へ
出ぬ
行ひ
行ひ
行ひ

[illegible]山杉くゆらけ[illegible]きこし合を[illegible]杉板くろく苔[illegible]
[illegible]知角の天と称さて十余尺る木格を波て山間八
さ[illegible]加の佐を[illegible]くの[illegible]と好の山[illegible]ちの[illegible]れハ石上社
小院累窟と称いけら姫源の死軍法[illegible]法の石[illegible]を
人[illegible]

木曾ゝ[illegible]を佐[illegible]に　文　木を

と[illegible]人数一旨を柱子称[illegible]佐しうれよう数生石子湯く
[illegible]代よ[illegible]る[illegible]は仕のものと柱冊[illegible]
やき[illegible]を[illegible]佐[illegible]ものうれし

[illegible]と柱[illegible]に[illegible]

数生石を温泉の出る山[illegible]の石の毒[illegible]
[illegible]のたくひ去物のうれ天[illegible]に[illegible]かさみう数生又[illegible]

[illegible]ものハ芦[illegible]の黒[illegible]の[illegible]の畔に称る[illegible]
[illegible]戸数葉の[illegible]柱人[illegible]
[illegible]れ[illegible]と[illegible]
[illegible]ようれ

同一枝　柱[illegible]ら[illegible]れ　柳　うます

心[illegible]ら[illegible]の[illegible]に[illegible]川の[illegible]て松[illegible]さ
[illegible]ぬ[illegible]と[illegible]
[illegible]三関の[illegible]て風[illegible]の人[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の花[illegible]て[illegible]古人[illegible]
[illegible]清[illegible]
[illegible]の[illegible]れ　[illegible]良

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清水寺を八坂の西に見て人丸さとをすぎ
日岡とゝらるゝまでやまの一すぢ
月の輪のうゝしをこゝに懸て伏見
四宿八坂の山際一里半をうしろにあり飯塚の里鍋野とゝ
ゆゝしゆくゝ九山をこゝに見て日うの田舎し
樹ゝ大なる松ゝ人のをしゆるゝまをくゝ海を眺ゝ又
かゝるゝ仕方ゝ一家の石碑を建て中ゝ二人の孫ゝ
し先ゝ立ゝ女なれども加ひしく一き者の愛ゝ
まゝ殺をぬぐ男隠滅の石碑を建てゝ
寺ゝ入ゝ茶を乞ゝ義経の力弁慶の笈をゝ
めし什物ゝ
笈もゝ力もゝ五月かゝれ就帰

五月雨のゝ一ゝ女牧飯塚ゝ泉川ゝ入ゝ宿を
かゝゝ出ゝ山ゝ一ゝ家ゝ灯ゝ点ゝ
いゝの火ゝ点ゝ雷鳴雨
ゝ降ゝ上ゝ雨ゝ降ゝ入ゝ
物ゝ雨ゝ降ゝ清入ゝ
又旅ゝ枕ゝ
ゝ
旅ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

岩清水やとる

式限の杉をしてをめ見るに根ハ生除りて二本わの

れるもくのの姿にしるしなる風雨はげしかりし

出世者如つのうみてこうしく人出来て伐さる為川の橋

杉をもとれるるもれとはれいるや杉出しひ法れ

後ろ代こはれる伐成ハ根絶ゆとせとゆる冷降葉

はこうちとこのほひるめし後杉のけきるふん付ら

たけるるは杉大をやせ通さるるとを年自して

[illegible]

[illegible]

[illegible]

桜 ゆる 杉 二本を三月 伐

谷川を渡て仙蓮入りやえんかくし旅宿をもとめて

四五日逗留すこて西立かまつとふものゆいさう心ゆるすの

とゆて知人よりの手はさるられ歩ものを考宣伝れ

ようく一日東関寺宝蔵神の秋きけ中ひひて秋のけ きおもひ

やうるる田横神はくしら宗八ゆをひ咲ようしのけとをぬ

杉の梯子入て宝を本の下とをとうむるかくるが法られ八古

てをうるひみるさををのをとをくるれ畑重天神のをやしるれ

とををのみさををのれるれ畑重天神のをやしるれ

且紺の法統付るる学鈴二足飾すされ八ケ風海のをれるの変

五て世六宗をゆるをて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のわれハ小上川南数ようふうとも大河し石川ハ和泉ら妹をめく
りて高野の二ツ大河ハ義人康澄和の四位ハ石の寺を隔て
南数ひをさしうい矢夷を防くと尺しうきて義をすく
まる性地を能り功名一時の誉もりる国俗れて山河ひう
堤者うして草まるしうと望おもあさ時のうつきて伝を
義しけるぬ

えをや作くものとうつるのはと
うの志ろ色を方人角の白毛うれ　貫良
かねて耳聚しる二書き家帳す経書を三将の像を彫し
光書を三代の板を納め三宝の仏を安置す七宝荘厳を
く珠の庭風を破れ金の柱ハ朽ぬる朽ぬ既ら数度を荒
の義とれるく人をを四面ひくしかるみる蔓を荒ら風雨

三のく数海を宗の法念をうあれ
さみしれ御窪　彫してや　光　書
南数を人をうを尺やうを岩の里を海ら小足塔ら山の小高
をうくあるこの海ら屋敷の寺ようて出羽ものらしい
とう性法拡人中れるる変なれハ寺ものやあくきて御
少ら寺をうを大山をの海ってを既ら書けをハ射人の家
を見うみうを今をもとむ三宝風雨ひれうを聚寺を遍満
　　　

かゝる世思ひもかけぬさまにうつり行ゆくすゑのたのしみ
なる山桜ことしさいまだ春の花のこゝろ地にうつり
くらしてやがて夏の山ぶきの中にうもれし水を
まくらに岩を踏さ脚をつめたくして最上の景色
かの薬師堂一きのこのもとに不用のすゝけ
過てやおぼつかなく佇みしに悦ことわれぬ詩をかゝ
さ、絵とかくのこゝろ
尾花沢にて清風といふものゝ家にまねかれ二日
志ひやしらふに招きもてなしかりひさまよう旅の情をも
れハ月ハ雲にかくれて長夜の心ちもとうきかしよもすがら
涼しさや蚊帳の外に明ぬる
さびしさや岩にしみ入蝉の声

須磨を伸うしさ紅粉の花
禁酒すゝ人ハ古代のすうさうれ　肩良
山形領手之石ちゝ山寺のうち芭蕉大ゆの一番巻ゝし絵ゝ
清閑の地ゝ一尺ゝ人ゝのすゝむるゝ信ゝ尾花沢
ゝ千万七里ゝ
宿ゝ至ゝ山上の巻ゝの浮ゝ岩ゝ巖をかゝくゝ山ゝ松
柏手ゝ古ゝ志ゝ苔滑ゝ岩上の院ゝ扉ゝ実ゝ物ゝ
岩ゝ巻ゝ岩ゝ佛閣ゝ
ゝ
さびしさや岩にしみ入蝉の声
ゝみ川ゝ大石田ゝ
古ゝ俳諧の稱ゝ

[illegible]

六月廿日羽黒山を発し月山に向ふ
代金壱両の関銭を払ひ清水流れの
[illegible]

[illegible]
五丁程登て清水流れ有り
[illegible]
里山と号す
出羽と陸奥との毛羽を此所の境とし風土記に
[illegible]
獻を属し天台止観の月明らかなる事
[illegible]
霊山吳服の験効人貴し且恐るべき事共
[illegible]

八月廿五日出る本陣を引き宮籠り所をてみ
ばかりなるものこれを見るに宮の中に水をたゝへ
出るなり八里更に月行道の平野に入るとゆやしまれ
鳥絶多くえく頂上を踏れハなほ〻月はるゝ遠を愛
深き枝をしたゝ仰ぐに待むてゆ消れハ湯殿の下る
谷のかゞやくに銀沢小屋とうゝ水霊水をえゝ山
下りに際斎一さく剣をうつ弱り月山と紙をきりて
寄るゝ賞をうるかの就泉寺剣を深くゆ千時莫那れ
芳をきゝ山岳地蔵の軌ほゝぬとしゝ祈り岩手後
うけをきゝ体ゝ山伏三尺をうゝ祈ゝ様のはわしゝ
ひゝゝゝ降後をの山ゝ水をまゝまれぬ金様の
元めゝゝゝ炎天の様ゝゝ蓮ゝゝ行手信

西の宮より湯殿ゝ祈ゝ過ひむゝ祈まゝて受ゝ過ゝ式
山中の湯殿行者の法式をゝ伝ゝゝゝ梅ゝ仏ゝ
芳をゝゝゝ祈ゝ祈ゝ
持ゝ頂れハ湯宮参の雲を伝ゝ三山祈れの名ゝ経冊ゝ
深ゝゝゝゝの三ゝ月ハ月ゝ山
雲の峰いくゝゝれて月の山
かゝゝれぬ湯殿をめゝす紙うれ
湯殿山 参ゝゝゝゝふゝゝゝ 骨良
月足をゝゝ野宮ハ城に長山式重行ゝゝゝ
動ゝゝゝ紙法一宮ゝゝ左ゝ伝ゝ送ゝぬ川舟ゝ
酒田のみなゝゝゝ測度不ゝゝ醫師の法ゝ船ゝす
湯ゝゝ山や炎海うけてみすみ

美濃より海を入ること川
江山水陸の風光面白き事一国の海湾と方寸を争ふ海岡の
陵より赤石の舟山をうつす磯を伝ひいさごを踏て千隙十
里の新風かぐはしく清波底透徹して
多海の山かくす園中に英作て白と又赤れるとを八面
海の晴色きまる彩雲の間に隠れ入て雨の晴
きをたのみ千鳥天にくれなゐをさしもつ浦
湾を舟をうかべ三重遊居
の作を詩ひむるものは舟をはうれいの花の上にくる後
き樹の色木あり清めの花命を弱り江上の陵ゆく
神功皇宮の御墓を弔ふ寺を干満珠を玉代を行幸
ゆくしをもいまをなほ吐寺の方丈の中に

宮殿と樹八風景一眼の中に尽て南に多海をさえぎる世
かけうつる江千ゆく動ハむやしの寄波をかきうつ玉を焼
もとにく秋田千かるふ芦かくて海水千かくて浪を入る
雪をはうしをこの眼横一里はるゆく伊松島ゆかりひて
又てあり松しハ出ゆくを湾をもうてさひ
さ出ひをうてくを地の魂をまわをまを仰ら
きをうを雨をを能うあるの花
ゆこをや鶯徑めれて海すし
象潟
象潟や雨に西施ねむの花　曾良
みのの国の人
ゆくの象や戸板を敷て寝まみ　芭蕉

岩上の雎鳩の音をそへる

波こゝぬ袖うつるわみきこゆ　曙良

潮田の名所なれども小陸奥のやうに宮むかしの思ひ
猶こゝいかなりし人さが賀の浦まで百三十里しの白風の軍
をこゝにハ秋の波千鳥ゆくゝ秋中是一ふう
は寒ゝ取り出れる芭蕉の岩ゝ神をあわす病者ゝ
をもこゝよせ

文月やゝ海ゝ岩の秋手ハ似合　芭蕉

海ゝ海や佐渡に横ゝふ天河

ゝふハ秋しゝれ天ゝ小ゝ一の
歌ゝをこゝさつゝれ佐ハ秋引ゝて横ゝゝ一百隔
河の方ゝゝ記女の名ゝ二人ゝゝゝゝゝゝゝ

これゝゝゝゝ文ゝ物語するゝきけハ秋佐ゝ新潟ゝゝ和
の海女ゝゝし伊勢の参ゝ宮ゝ宮ゝをのこの道て
ゝゝすハ古ゝゝゝゝゝゝ文ゝゝゝめてはゝれゝゝ伝れゝゝ
ゝゝゝ波のよゝゝ行ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
佐ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一本手迹女もの　和歌　月

曽良よりかれハ書てくれ侍る百四十八の俳諧の歌仙

如川　そそくらて　蛙　古寺　海手　山　墨絵の屏風ハ春ふかく

もの　初秋の　雲　山　人　暮れハ　五里

後つくしひしてむ　の山　入　ひかた　かれ

芭蕉の一枝の　すもの　いとい　かけ　入

そのもやそけ入　秋　海

郭の赤山　かう　雲　八七月中の　月

大坂　かふ　人　旅宿　侍る

一句　人　句　侍る　知人

しに　月　見追善　侍る

塚も動け　秋　涼　八月　のこと

侍る　秋すしまにもけや　戸　菊

き中金

ひらくとりも　雁　秋　風

小松　雲　小松　萩　芒

世平　田の神　神　宿　等の甲冑　源　武

屬　対義　ちより　ひ　辛　の

子　ひ　月　庭　ひ　蔵　ひ　の

つ　先　張　子　秋　ひ　の　ち

子　く　く　社　ら　先　ら　ひ

の　ら　孫　記　子　尺　く　ら

むさんやれかしてのこれきりくに

山中の湯泉をゆくほどきりぎりすの鳴ていとあはれなり

山陰にて觀音堂ありこれ山法皇三十三所の順礼をまねびて

作大慈大悲の像を安置したるなり谷組の家をこうら作りとて高さ九尺ばかり

巻きたるの小屋岩の上にあり

石山寺　石ばしる　きりぎりす　秋の風

湯泉にて

山中や菊とるまでぬる湯のうれし

ゆきしとすうの八人米こ助しかれの父祖父母を

みなの貞室にあるまのむうこに来りしに風雅をこのみ

らるるに湯に浴して貞室の門人と聚て歌をきりぎりの

一村家同の料を清まして文むしかうとて来ぬ

曾良八枚を書く作者の示唆を書るゆれいたるこの

ゆきしくるるもの　萩　曾良

とまるまるひるの山　ひとつ　ひとつ

ものやまるもてしてまるまる

ものやまるもてしてまるまる

大聖寺の城外金昌寺にとまる俗名加賀の地に貴られ

の松はちまるまるまる

所　青　秋風や　山

と詠て一枚の隔子里に同じ秋風をゆるして二間宿る

以八の句のくせをもて淺野有うすむやに待板ぬて食堂

に入るまるを敬おもくと心卑辛にて来りてまるを記

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みちけくのけ郡をひきて大き伐既に伐あんとすれハ
かれハまうしたの富士地をくてゆうちをさんしる事のおそ
ひ風のからひれとうしものみおそてはられを筆お
すさひうと書物しれのそひうにふくあくたうやとをお旅
荷のたのひとはやう人しのこの紙の紙は二うをあぬ
うひしさよ孫子三をきの書物をさしてふうこひを道子
流をそくてもしこ月のあうは花ちをれのあほひも
さうう竜ふまれハ人しのちきうもむりしかうしふ伐
ハはうえをさして古ふ流ゆをうを三間の茅屋はをし
しれ秋の程いときけ割れ竹の枝折戸やすうこのて
よ程はつしをうしし南をもひひ他を水樓とおう
代ハ不二子書しを宗門帯をすを見てあ めうし浙江は源

三十をの流よりかえて身をたまりよりつれハ初月
はのうををいひ雨をうしむ名月のをひはひも
も先生盃をうつすを紫陽しを琴をおはををれう
歳ハ半吹をれて風鳥の尾をいてをしあ青扇彼れて他
をうれ　寺はれ花はくをやうをひ巷路をくれと
も斧をはうをひかの山井不材の数本をたくて千性す
俤懐素ハ毫を筆をくしあ紙模渠ハ新幾をえん
を流水をのちうをとをしを筆を子世ふをうをとをて思
ハうけを逝ひて風雨をやれ歩ををうを

宗門雑　俳言をふるし神の文し

をを手の秋かをを人をかをををををををををを五月の初め

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

烏賊

一烏小大ありて名を異にすれども小を烏鶏といひ大を烏賊
といふ此魚反哺の義を傳しを多中の勇ありて成ハ
人家にゆく人をつみ記に翅とあり〳〵て二星の蝶と
なれり成ハ大事のやうを知て事ハをきうう事をはか
らうむとして中のはかりあるをみとめ人をおかすへ
ゆくなり人を誘引の才を情ありといひ外ハ信を宝れて
かうちをやすしやすし公金物の中にいかハ手ハ大し又ハ心を
うをふるなを手ハ強ふ一ハ害ありて大し能中かの爵をハ
性偽張を示して能をの翅をはれとうの爪のとをとと
をおそれ内ハ腸胃の味をもくあるハ食るのいろ〳〵

帰対を人不四の意を抱くうれふる凶事をしめして鶏を
むかふ里をはなれて八重物の精をはらしめ用殺をはりて用相
を費をして粮を幸者の労をしるしを成ハ者のかしをつ
うみ泥の地をうちふる人の戸をやちまちの待をむさうう
て孤子いのは者をいのちをはやまう鶏の古仏をしてはあ
ちうを使ふ是を礼泥むをうるて大うして女房をせん
さるはやうをしを泥うてふ心貪欲をうをかちを是をて
使うる人をはうて長使といふ釈氏をこれを情を俗士
も甚しをむは泥をくはうしを輿を先をうして
三足の金烏を成をれんてを

笙 張説

[illegible]

[illegible]

[illegible]

情とそ[illegible]
人生七十[illegible]
二十[illegible]
年六十[illegible]
[illegible]
是[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
人[illegible]
[illegible]
杜之[illegible]

友[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
尾陽蓬左樞木[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

銀河序

加賀さかひ御しさ[illegible]
伏波ゆ[illegible]の西十八里余波を隨て東の三十五里に
横たゆ[illegible]の嶮岨[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

信濃紀行跋

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

小の浦ふく海ふきをつくして千鳥を百川の流れに
きれくもくもくもの秋いもしくもあて作者の詠ず白
川の秋風ふかの演義の名をゆてくもくもくしのゆく紙
ふくもくもくもかくもかくもかくもの名ゆくくもくもの名ゆあふこ
おくるくもくもくも

再とゝられて見そきけハ世もむしあるを別て秋の風そよ
くとまつ〳〵れて一村雨をゝて山吉の音ゆつすゝもの
むしの声ハ人しくあるゝ物かな

虚栗集跋

栗とゝよ一業世味四ゆゝ
李杜ゝ心酒とゝ炙て寒山ゝ汁粥とゝすゝこゝ
世句ゝとゝはゝてきくに
俳とゝ風体のゝの牛子ゝ
ひゝゝ風雅栗や
遠の情つゝゝとゝゝむ
小僧ゝ上陽人の筆の中ゝ
下の弟とゝ眉ゝゝ釈とゝの姫娶姉のゝけむゝゝとゝを
ゆゝゝゝ寺の火影前の花穴の橋とゝ打ゝ白氏ゝ夢を
仮ゝとゝゝつゝて和心を教ゝゝれんとゝ
世話雲振動ゝゝとゝゝゝゝゝ言の鼎ゝ句を株とゝ談の
泉とゝ文とゝゝゝ冷ゝ見ゝ花紙のゝゝゝゝゝ言ゝて
ゝゝのゝゝとゝ待

閑居箴

ゝゝゝゝゝの菊ゝゝゝゝゝ人の訪ゝゝゝゝゝゝゝ人ゝ
ゝゝゝゝ人とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの釈ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

和一はけてををふる丸又ゆ、をを、亦てををを丸夢
ををつはる柏をををしの雨や
海の色ハいと〳〵わるひとつの色

自得箴

ものふをををひらふをををひ飢寒をのをを枝の
枝て
色をををを人の為をを入ん事の為

扎銘

閑を外を財ををうけて嗜雪炭霜の事をやしをあを
閑を外を業を知を意浪才の精神を拾を

新を財ハ事ををを義事の方すを入たくを外をわ
ものき一物之用をををすをく方さ八寸おをて二尺両御
つの色つち三の刺を彫を刺をををを牝をの臭をなを雨
をれをはけて一用ををんや又二用ををんや

題葉子集　元禄仲冬生莚書

座右銘

人の為をしいふて私の為ハ為をを為をれ
雑口
ものいへハ唇さむし秋の風

孤を銘　山素堂

一歌 重陽山　自笑梅舊山
莫懷首陽餓　這中飯顆山

[illegible]

きりくちんとさうのむすしきすがらつのをてとなれをすが
をとーをくをををいをとて賞山くのろしとさんてをうの
和ひとつ歌ハのろおををの吉氏

栖を解

[illegible]

鄙言　自

おもてもふるつのけさ手紙ハ谷の松とゐるなるらん

[illegible]

ゆきさらぬ我作ハはうてかゝる人うとゆくれまるる

與義人文

大和国長尾の里といふもとハさるゝ新幸ハよりゆふ公里

[illegible]

[illegible]

[illegible]

通明らうゝ

七りのかさゝ八ゝゝ結合羽　松風

雲竹讃

俗の素門雲外ゝつゝれ像やゆゝん有ゝの文ゝ二の和
ふゝむけゝゝは俗を垂てこれゝ俗ゝとやゝれゝれ然
実八六十年ゆゝう年八既ゝ五十ゝちのゝとゝ紀寿中に
一ゝ寿のかゝちゝを是ゝくゝゝつゝゝ有ゝさ
ゝゝゝてす

こちゝむけ糸ゝゝゝゝ秋の雲

杉折賛

此杉のゝゝれゝ名付ゝゝすのれ上つゝゝゝゝ

[illegible]

張仙像

信陵君松下の景を[illegible]
仙を[illegible]吹琴[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

悔まし忘れ給へる事の枝いの
子ゆかくとはきしくとうの時の世さへしられ
ぬ　きゝ元母のうゝみはけうとれたりけき去てきかゝ
ゆつゝくてひとゝる親族のまゝひとゝさつむ白くゝ
終まもまとゝゝてうゝ話ゝ末つかれゝ弥えまゝ
ゝとゝ先主或五平のゝれこゝうはゝと或の一生とつ
ゝて事或とゝつくゝ枝るゝ今月のゝうゝまゝゝはけ
ゝ財むつゝうゝぬゝゝうゝ別くてゝ人ゝゝきのゝゝゝ
ひゝゝて父のゝゝくゝのゝゝくゝ呂のゝゝくゝまゝゝ
いひふれむつひゝゝ併の態の枝ゝまゝわれゝ枝ゝゝきぬ
ゝゝぶはゝゝまゝゝゝゝおゝひゝのゝんゝゝれはゝつゝ
ゝくいゝんゝゝれは猶ふゝゝゝゝて呂枝ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝむゝふのみ
秋はゝゝゝれゝゝ幸の枝

十八樓記

みのゝふゝゝゝゝ樓はゝゝゝゝ賀島氏ゝゝ
いゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

武倉記

[illegible]

[illegible]

幻住庵記

[illegible]

阿弗の手像とかの唯一の寺にて甚いもかしこし
やうなれば利益の多きをあがめ
人の信ずるこれいとあり神さびたる
松にて苔の上に松雨の音
弧狸ふしとなりて
勇士苦行の
むかしを夢
市中にて十とせ
みの虫のうのとしにて
はるかなりて
踵を破りて
中人にて
ね所をとめ
しきさくおりひとをめ
又球の山
るようさくけ
無しとそ
ゆ山八
ようおろ
かりさも
笠取
うふのや
すとい
陸の

なる巖を丈う峰稜絶壁山ゆく足ばの里をいとくろ
義くてゆーゐちとてうてうみけん美濃集の姿めう
なる峰峯をたんとうふんとくしたのあうくひのほう松の
樹つうう行の条ゆくとくあくく樹の絶うけしたつくかの海
業をいくをいくをひと屋峰をたをもくくさまる翁徐住
うたうたゆびくと岳麓山氏とうて長新をこと叔
如雲山を風をひわうてゆまるしくいけんかる時ハ
雲の清うをはをくうくくくくくしのをををひて
一樹のをををへいとうしはをを住けん人の絶心をくく
住ゆ住をもくみを見る知すをれ杖仏一をを隔て
ををの物ををををくぶをおれといをををををを
楽寿を良山の信出ハ加義の甲斐ゆをを巌ををけを法

をを上をいをををををを人ををを就をを先いを安しと
家をを体をを物住院の三ををおをををやをを学院の沁念ゆ
をを知ぬをくを山居をを旅ゆをいををををををくを外
本をの桂を越の美濃ハをを裏ハをを枕の上れ桂をけを屋を
まをを法をを人をををゆををををを成ハをををの翁田をのを
をを入をををををのををれ桂をひゆをを光の屋ををけを
かををふをを家ゆをををを敷を山のををををれハ秋生
新をを月ををををををを乗をハ関西を
是非をををぶをかくをくハををを家をををの山秋
をを法ををのくををををを良病人を住をを安ををを
をを人を仏ををををを手月のををを一つををを身の科を
おをを成ハ仕方屋命の地ををを和をを仏師般泊

[illegible]

西行法師

山ざくらさきそめしより年ふれど花の心をしる人ぞなき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松の枝にうゑたる大さうの一文字の枝上にんをかさしの貴紫藤くとゝろやくもの風雅をゆめとうひたる趣す等下の仙菊の枝根ハ葉をとゝく高砂牡丹をおもう人寿生をゆめ一人の人下の方ゝ桂木柑橘八千歳を尺り枝等のかゝちをなれ唯松ひとり青柳をもてきたりてきけいきをこゝろの楽天日松のくゝ嘉言をいたゞかゝ家をゆとう人員とまろうこゝろあをを歴するみをゆゝ長生保寿の言歌をおもはゝ書ゝくゝ

文禄四年仲秋日

文禄合戦記

嗟歟日記

文禄四年未卯月十八の時時迄ハて十本の黄柿尽を取るれ此ゝも千本を尋ゝ求ゝ求ゝ尋ゝ求ゝ

きゝ一ゝ一ゝ降ゝつゝ春ゝ雨ゝ

仰ゝ

安徳物語　源氏物語　机一　硯　文庫　白氏文集　本紙一人一首

陸ゝ奥ゝ紙ゝ正ゝ宗ゝ の ゝ忘ゝ千ゝ さゝ月ゝ し ゝ の ゝ 菓ゝ子ゝ ゝ ゝ 名ゝ 酒ゝ 一ゝ 壺ゝ 五ゝ ゝ

陸ゝ奥ゝ紙ゝ の ゝ ゝ ゝ 酒ゝ 業ゝ の ゝ 物ゝ ゝ ゝ ゝ 杉ゝ 本ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

奈良路ゝゝゝゝれゝ清ゝ閑ゝゝゝゝゝ

十九ゝ日ゝ 牛ゝ 阪ゝ 川ゝ 寺ゝ 詣ゝ つゝ 大ゝ 井ゝ 川ゝ 右ゝ ゝ ゝ れゝ て ゝ 嵐ゝ 山ゝ 右ゝ ゝ ゝ く ゝ 松

社尾の里に住けり[illegible]人ゆかりにおはせし　松の尾林
の中に小庵を結びきといふ所すべて上二の時雨に三所ゆく
れ〳〵しらんかの仲哥の詞をとりて弱とあの橋とを
はかりうつれハ志ゑくくられるくふかもいとハ三軒屋の陳
叢の中に侍りしを後に極りかしこく移植ける
上に起ゆきて孫子叢中の叢芦とふれり昭君村の柳亟
女廊の花はもうしをおりひやるる
うゑてやけのみとれる人れ　宋
　　嵐山叢れ　きけ　ゆ　風の　能
斜に及て叢林をうゑ詞うん地京より来る生来京に詞る
書よりの
廿日　小時雨のふるんと　羽紅尼来る生来逗中の吟をし侍る

住みなれぬ人ハ世のうけ　叢
叢林をハもうしはの住わるまにしを雪く新住すふ
のくるはるるみるうれるる芳のさたをよるを今のはそれふるさと
ゝ心ゝまれ彫きし梁画の砌も風に住れ雨のあれる奇
石怪松と蓬のこのかるれる竹樣の赤子柚の木一すゝ花
かるはるれハ
　柚の花やもゝのしたのそん料理の丁
　ほゝまれ大牛　叢をもる有秋
　ちやらんいちこの寿時雨の山　尼　羽紅
吉本見の方より菓を調業のものれと弱てを有ハ羽翼吟
をとゝめて奴座一張を人ゝゝ以られハ秋をいはるゝこゝて
秋半をてけるゝ初のく起もて屋の茅を多かゝ永ゝて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

千年ぬ水の水手手の住給へ　芭蕉の四位を家住と
為て

むすび　住小猫ひとしすまれ　芭

又ち

秋住とろろ杖二丈くらべて桃一本おゝまつ花を
見ばとて

さら桃　芭を手あるを一さくら

花を文子

物皆の春子ちるを

む代やおされ心子紅ゆる紅

廿三ち

ちを折ハ木枕子ゆる文ゆ月

文の歌や木魂ゆ歌ゆ

笋やおさるをむ世住のすみ

麦の穂や涙子ゆ麦て帰を荘

一ち〳〵麦ゆくみをくひくろ

能外の俳ゆ一ちをきゆ

廿四ち　題芭蕉庵

豆植ゆ畑ゆ木枯ゆ名　芭蕉の名　九兆

芭ゆ及ゆ芋京ゆ芋ゆ猿所ゆ猿ゆ宿ゆ大津の尚白

ゆ宿ゆ宿ゆ九兆を望岡ゆ稲ゆ付ゆ書伯九兆を問ゆ

廿五ち　千那大津ゆ問ゆ史邦文草尺訪

題芭蕉庵

除野哮峰伴鳥魚　能荒夷似野人居

枝阪今六赤帆卯　青葉く阪堪子書

百小督墳

強撹愁情出涼亭　一輪秋月野村風

青季僅切那琴韻　何処孤墳竹樹中

芽町ゝ二葉ゝ義ゝ栃の実　文草

道中の吟

ふくもきくふくや　枝ゝ梅さくゝ　史邦

青山谷ゝ感句

杜門夏句陳春己　對客揮毫素水游

乙州来て武江の吟筆賀ゝの俳諧一巻共中ゝ

半俗の言葉入ゝ

白井峠　ゝ

ゝかゝ　ゝ紀　共角

稲の黄ゝ　狂ゝ　月

雨ゝ降ゝ人ゝ

宇都の山女ゝ

いつゝゝを先ゝゆゝ　塔忍

中の刻ゝゝ雷遅雷降ゝ

大寺ゝ八ゝ秘ゝ

廿六ゝ

芽町ゝ二葉ゝ栃の実　文草

ゝけの葉ゝ　芭蕉

悩生ゝ　古素

人ゝ　文草

ゝ三度　乙州

廿七日 人事に弼なり冥

廿八日 寅の刻杜若の[illegible]を[illegible]て深法しく覚る心身おのゝ
そゝる[illegible]八寸を[illegible]て[illegible]を[illegible]
[illegible]を[illegible]ゆえに[illegible]を[illegible]する
[illegible]蛇を[illegible]と[illegible]膳[illegible]
[illegible]を[illegible]八聖人男子の[illegible]
[illegible]想[illegible]の[illegible]
[illegible]いを[illegible]命[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]八[illegible]
[illegible]を[illegible]

廿九日 [illegible]の[illegible]を見る
高[illegible]舞 天星似胄 [illegible]川通海月[illegible]
[illegible]の[illegible]ふ叶古人[illegible]絶[illegible]ふ叶[illegible]

卅日 [illegible]
江州平田の照寺李白詩[illegible]尚白を[illegible]清是
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

二日
[illegible]良[illegible]芳[illegible]の[illegible]を[illegible]
友門人の[illegible]

[illegible]やうけつて入いる[illegible]の海
大唐やうしゆく[illegible]の系
[illegible]ようて大井川を舟をうくて[illegible]
[illegible]の海[illegible]
三日 [illegible]の海岸[illegible]
[illegible]
四日 [illegible]
[illegible]
[illegible]

伊勢大仏記

いつれ[illegible]
[illegible]上人の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]上人の[illegible]
[illegible]
[illegible]

文六子功者ゝ[illegible]ゝ　石井　上

[illegible]風信子賦

[illegible]

白髮吟

[illegible]武陵より古里へ[illegible]二十[illegible]

[illegible]

[illegible]

卯月の中比伏見の浦一見せんとて山吉屋にうちけく月の
いとゝ霧ふる事の名残をとゝめかねて其日海のほとりに船を浮す
ほとゝぎすの声聞のあるきゆれハ
月ふるゆれと角もらるゆ山の月

更科姥捨月と題

更科姥捨月ゝ題きりあるゝれハ八月十五夜のあるを
立ゝをくり出すくれけれハ秋子むを考と並枕すおりふし
ものくれ手枕文科の里ゝおつ山ハるゝ里ゝ一里ゝ
う南ゝ動月ゝ植をうゝ月ゝすゝきゝくゝゆゝけかと
かゝしゝ出れゝ見ゝ山ゝ海ゝすゝるゝこゝなくゝさゝん

うゝしゝいゝけゝんゝゝゝ

[illegible]

田中一家[illegible]あれか[illegible]引[illegible]行[illegible]

人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

すまいるこけやとやうしは文そとそ之きうぬ

裏俤不雪と初

媒婦紙

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]て共酒の楽天の詩をもかりて文芳八こそのく本[illegible]
[illegible]数分月を物の交来れ[illegible]つきの[illegible]
[illegible]ふけるれ中[illegible]性[illegible]ハ酒[illegible]
[illegible]
[illegible]ん[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

米[illegible]
かくて三[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

三井寺の門しまやうの間

[illegible]

[illegible]

本写ニ入ル

[illegible]

十月の時雨の雨の音の海くれてひとつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

きよ僧ゑの俳むくゝ紙ゑの六ゑ名ゑ名ゑ名ゑの舞の名ゑ名ゑ名ゑと
うんゝゝゝゝきの八人用ゑきのゆきやゆゝんむゝ陶宋ゑゝ舟ゑ
のゑゝゑゑ波のゆゑゑゑとゑゑゑゝ人ゝ家ゑの新ゑゑく作くゝゝん
子戦女の紅裾ゑ花時の翠袋ゑゑゑ